

## 促成イチゴの新品種「熊研い548」の育成

農業研究センター 農産園芸研究所 野菜研究室  
担当者：田尻 一裕

### 研究のねらい

本県のイチゴは、ここ数年作付面積は約400haで、増加傾向にある。本県は九州の他県と比較しても1戸当たりの栽培面積が広く、その上、主力品種「とよのか」は低温期に果実の着色が悪いこと、果実揃いが悪く摘果、玉だしに多くの労力を要するなどの問題を抱えている。全国的には、公立の試験研究機関で新品種育成の取り組みが増加し、県オリジナルの新品種が多く開発されている。

これらのことから、今後本県イチゴ生産における省力化と品質向上を図り、他県産地との競合に勝ち抜く、省力的で食味、果実品質の優れた促成イチゴの新品種開発に取り組み、県オリジナルブランドの確立を図る。

### 研究の成果

育成した品種は、大果で極めて食味に優れ、省力的な特性を有する。

1. 「熊研い548」は草姿が立性で、分けつ数と花房当たりの花数が少なく、摘果など管理が少なく省力的である。
2. 果房の果梗伸長のためのジベレリンは不要であり、省力的である。
3. 無電照条件下でもわい化がほとんどなく、電照は不要である。
4. 頂花房の花芽分化期は「とよのか」よりやや遅く、「さちのか」と同等である。
5. 果実は「とよのか」より大きく、果形は短円錐～円錐形で、果皮は鮮紅色で光沢が良い。
6. 「とよのか」に比べ果肉硬度は高いが、果皮は軟らかい。
7. 無電照条件下での収量は10a当たり4t程度が見込まれる。
8. 糖度は安定して高く、酸度は「とよのか」より低く、「さちのか」より高い。収穫期間を通じて香りが良く、食味は優れる。
9. 「とよのか」より炭疽病に弱い。

### 普及上の留意点

1. 作型は促成栽培とし、定植は花芽分化確認後とする。
2. 炭疽病に弱いので、親株の管理(2～6月)と育苗(6月～梅雨明け期)は雨よけハウスの下の高設ベンチで行う。
3. 「とよのか」より休眠が浅いので、電照はしない。
4. 果房の果梗伸長のためのジベレリンは全果房ともに処理しない。
5. 果皮が傷みやすいので、適期収穫に努めるとともに果実の取扱いには注意する。本品種の果実特性を活かせる収穫期間は12～3月である。
6. 基肥量は10kg/a以下で、「とよのか」の20～30%減とし、栽植は外成りとする。
7. その他、本品種の栽培マニュアルを遵守する。

[ 具体的データ ]

表1 形態的特性

品 種	草 姿	草 勢	葉 色	小葉の 大 小
熊研い1548	立性	強	緑・濃緑	大
とよのか	開帳性	やや強	濃緑	やや大
さちのか	立性	中	濃緑	中

表2 頂花房の花芽分化期

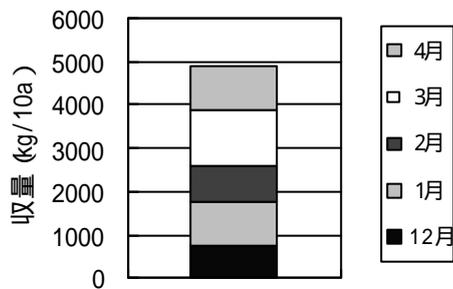
品 種	平成13年	平成14年
熊研い1548	9月16日	9月19日
とよのか	9月13日	9月17日
さちのか	9月16日	9月20日

注) 農研センター野菜研究室において  
花芽分化程度が肥厚後期に達した日。

表3 果実特性

品 種	形 状	果皮色	果肉色	光 沢	平均果重 g
熊研い1548	短円錐～円錐	鮮紅	白	極良	18.7
とよのか	円錐	鮮紅	黄白	良	12.5
さちのか	長円錐	濃赤	淡紅	やや良	12.1

注) 平均果重は平成14年度試験結果 (普通ポット、無電照、無摘果)



熊研い1548

図 . 月別収量

注) 平成14年度試験結果  
普通ポット、無電照、無摘果



「熊研い1548」

「とよのか」

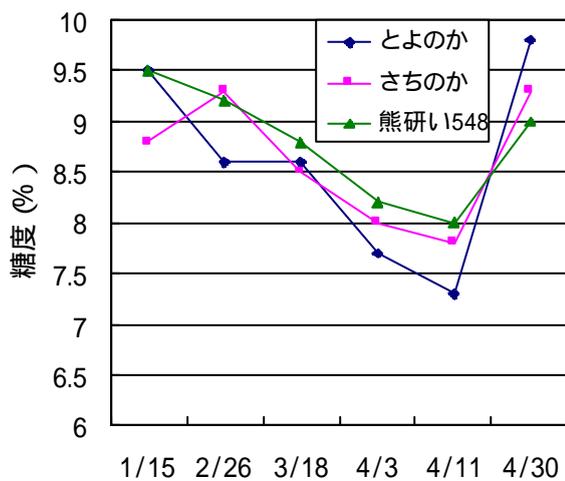


図 . 果実全体の糖度の推移

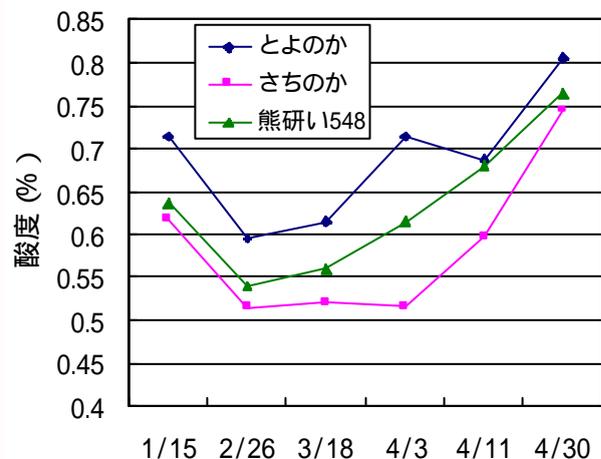


図 . 果実全体の酸度 (クエン酸) の推移